氏　　名	牟田　理恵子
学 位 の 種 類	博士（看護科学）
学 位 記 番 号	博甲第　８７２５　号
学位授与年月	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	一般病棟の看護師を対象とした終末期がん患者の家族支援ガイドの作成と有用性の検証
主　　査	筑波大学教授　博士（医学）　日高　紀久江
副　　査	筑波大学教授　博士（看護学）　竹熊ｶﾂﾏﾀ　麻子
副　　査	筑波大学准教授　博士（保健学）　三木　明子
副　　査	筑波大学助教　博士（ﾋｭｰﾏﾝ・ｹｱ科学）伊藤　智子

論文の内容の要旨

牟田理恵子氏の博士学位論文は、一般病棟の看護師を対象とした終末期がん患者の家族支援ガイドの作成と有用性の検証を目的に行われている。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

質の高い終末期ケアとは患者、家族、医療者間での対話が重要であることが指摘されているが、本邦の一般病棟では End-of-Life Discussion が十分に行われていない現状があり、その理由として在院日数が逓減化されていることや、医師や看護師が End-of-Life Discussion を行うことに対する不安や困難に感じていることが指摘されている。また著者は終末期ケアの家族に関する看護の重要性が認識されていながらも、終末期がん患者の家族へのアプローチが十分行われていないのは看護基礎教育に問題があるのではないかと指摘しており、終末期がん患者の約 8 割は一般病棟で最後を迎えている現状からも一般病棟の看護師を対象にした終末期がん患者の家族に対する教育は急務の課題になっていると述べている。そこで本研究では、一般病棟の看護師を対象にした終末期がん患者の家族支援の一助となる看護師用の教育ガイドを作成しその有用性について検討することを目的としている。

（対象と方法）

終末期がん患者の家族支援ガイドの有用性について、都内の大学病院 3 施設における一般病棟（計 26 病棟）に於いて終末期がん患者のケアに直接的に携わっている看護師を対象に調査を行っている。調査は各施設の病棟に家族支援ガイド、調査票、シール付き封筒を一定数配置後に、看護師の主体性に任せてガイドを持ち帰ってもらい、その後購読の有無を問わず調査票への回答を依頼し留置法による調査票の回収を行っている。

終末期がん患者の家族支援ガイドは、1）終末期がん患者家族のアセスメントが可能な危機理論などに関する基本的な知識を獲得すること、2）家族支援に関する看護師の意識を高めること、3）家族看護の自身の看護実践を振り返るセルフアセスメントとして利用できること、そして 4）時間的、人的資源

が充足されていない一般病棟の看護師が日常のケアとして活用可能であることを目標として著者が作成している。

終末期がん患者の家族は、状況が好転しないで長期化することで精神のバランスを崩す「消耗性危機」に陥りやすい存在であり、また危機回避と危機に陥るプロセスが図示されており一般病棟の看護師でも理解しやすい Aguilera と Messick の危機モデルを終末期がん患者の家族支援ガイドの理論的基盤としたと著者は述べている。終末期がん患者の家族支援ガイドは危機理論の説明を含むイントロダクションから始まり、家族に関わる諸問題、危機回避に向けた情報取集/アセスメント内容、そして家族への支援のポイントの 4 つの章で構成されている。著者は国内外の終末期がん看護に関する先行研究を分析して、一般病棟の看護師が終末期がん患者の家族支援ガイドを読むことで科学的根拠に基づいた看護実践が行えるよう、先行研究の研究成果について適宜図表などを用いている。さらに時間的に余裕のない一般病棟の看護師でも自己主導型の学習を行うことにより、終末期がん患者の家族支援における知識および意識の向上につながるように家族支援ガイドの内容構成、内容量、ガイドの大きさや色彩などを考慮している。

（結果）

3 病院の各病棟に調査票を 260 セット配置したなかで 155 セットが持ち帰られ（回収率 74%）、欠損値が多い回答を除外して 154 名の分析をしている。

本研究では、家族支援ガイドに対する看護師の理解度、看護実践への活用に関する主観的評価をガイドの有用性と操作的に定義を行い、家族支援ガイドの理解度と前述した家族支援ガイドの 4 つの目標に沿い、対象となる看護師が 6 段階で評価している。

家族支援ガイドの理解度は、ほぼ全項目において約 90%の看護師が理解できたと回答していたが、危機理論とアセスメントに関しては「よく理解できた」と回答した看護師は 60%未満であった。また家族支援ガイドの理解度は看護師の年齢、臨床経験年数などとの相関はみられなかったが、危機理論の理解度は看護師の終末期看護への関心や家族の関りに対する困難感の程度に相違が認められた。一方看護実践への活用に関しては、家族支援ガイドの目標 2）意識の向上に関しては概ね 90%以上の看護師から肯定的な評価が得られているが、1）知識の獲得では危機理論、アセスメント、4）実践への活用に関して「とても役に立つ」と回答した看護師は 60%未満だった。意識の向上は終末期がん患者の看護経験年数と相関があり、職位による相違も認められた。全般的に終末期看護や家族看護への関心が高い看護師は各項目に肯定的な評価が多かったが、家族支援ガイドの活用可能性についての肯定的な評価は約半数であったと著者は述べている。

（考察）

本研究の目的は、一般病棟の看護師を対象とした終末期がん患者の家族支援ガイドを作成しその有用性を検討することである。家族支援ガイドに関する看護師の理解度が高いことから、基本的な知識の獲得ができたのではないかと著者は述べている。しかし、先行研究でも危機理論やアセスメントに関しては看護師の理解や知識が不十分であることが指摘されており、これらに関しては自己学習型ではなく講義形式にするなど教育方法の検討が必要であると著者は論じている。一方家族支援ガイドの看護実践への可能性について肯定的な評価が十分得られなかったことについては、看護に対する関心の高さが影響している可能性が示唆されたことからも、終末期看護や家族看護の関心を高めるような教育が必要であり、基礎教育からの継続的な教育が重要であると結論付けている。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究は、一般病棟の看護師を対象にした終末期がん患者の家族支援の一助となる危機理論に基づいた家族支援ガイドを作成しその有用性について質問紙調査を行っている。著者が作成した家族支援ガイドは看護師の知識や意欲の向上が図れたことや看護実践への活用可能性を示唆できたという点において、がん医療の家族支援の質の向上に関する重要な知見を示している。

平成 30 年 1 月 29 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。